

共同研究を終えて

研究代表者 後藤 明

この共同研究班は、文字通り古今東西、北極域から熱帯域、さらに古代から現代に至る船を追究してきた研究者や実践者の集まりである。そしてわれわれの間では常に話題になったキーワードが2、3あった。一つは船と舟、英語では ship と boat の違いである。たとえばカヌーという言葉はオセアニアのようにアウトリガーの有無はあるが刳り舟一般に適用されてきた。しかしスポーツの世界やレジャーの世界ではカヌーというといわゆるカヤック系の舟が想定されている。本班の中では学術的にカヤックもカヌーとっていいかどうか、という点が話題となった。オセアニアのカヌーの素材は植物であるが、北方カヤックの船殻は獣皮であるという違いもある。また同じ植物素材であるなら中国のジャンクやインドネシアのピニシなどの構造舟は議論の対象か否かなどの討論が行われた。

このような議論を経たのち、本共同研究でわれわれが扱うのは植物であれ動物であれ、自然素材を使って作られ、風や海流、あるいは人力によって推進する水上運搬具を舟として研究対象にするという基本姿勢を共有することができた。

もう一つは身体技法である。身体技法論はフランスのマルセル・モースが先鞭をつけて以来、フランス語圏技術人類学 FTAT (Francophone Tradition of Anthropology of Techniques) の基本概念であった。幸い本班にはその伝統を引き、さらに文化の三角測量という視座においてその議論を独自に発展してきた川田順造が班員にいた。そのために身体の問題は本班の4年半にわたる研究会の基軸として共通に意識されていたはずである。

舟と身体との関わりは第1回目のシンポジウムで明らかにされたように2つの様相がある。まず舟を漕いで推進する場合、どのような推進具を使ってどのように舟を漕ぐかである。この議論の中で櫂、オール、パドル、櫓など推進具の定義と名称、およびその漕ぎ型の定義と名称が議論となった。

さらにカヌーやカヤックなど小型船舶の場合、体の姿勢や重さが舟の運航に直接左右する。カヤックのように舟全面を覆う型式の場合、体を出すコクピットの形状は乗り手の身体の特徴に合わせて作られるのが普通である。沖縄海人のミーカガン(潜水用のめがね)が個々人の顔の形状に合っていないと水が漏れるのと同じである。またオセアニアのカヌーではヨットと同様、乗組員の体重が舟のバランスを左右する。いわば人間バラストの意味を持つ。またオセアニアのカヌーでは船体がすばまり漕ぎ手はカヌーにまたがって乗る型式と船体に腰を入れて乗る場合の両方が存在する。

しかしフネとカラダの関係性はフネの形態や環境条件のみで決まるものではない。すなわちフネを作る身体は社会的に形成され、したがってその関係性や文化は歴史的な脈絡において理解されねばならないことを各班員はさまざまな事例から実証してきた。本論集もしかりである。

本共同研究では「フネとカラダ」はさまざまな関係性の中で切り離せないことを、抽象論ではなく常に班員自らがフィールドで作成した写真や映像を通して具体的に議論できたことが大きな成果であった。

終わるにあたりこの4年半、筆者は本当に楽しかった。毎回の研究会、そしてその後の懇親会で班員の多くから同じような声を聞いた。それはとりもなおさず今までやってきたことが思い切り仲間と討論できる、待ち望んだ機会だったからだと信ずる。またわれわれはこれで終わりにしたくないとも思っている。

毎回、貴重な調査成果を惜しげもなく提示していただいた班員各位、またわれわれの共同研究を支えていただいた国際常民文化研究機構の先生および事務方の皆様に感謝して、ひとまず終わりとしたい。